

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。
※「はらまち九条の会」は会員約380名。超党派で会員を募集中です。年会費千円。



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No.100

2009(平成21)年6月3日(水)発行

立葵

<156年前の1853年6月3日、ペリーの率いるアメリカ東インド艦隊・4隻が浦賀に現れる>

県九条の会・5月24日堤未果さん講演会「貧困大国アメリカの未来」報告

<報告:会員佐藤邦雄さん・事務局早坂吉彦>

「貧困層が軍事大国を支え、アメリカでも憲法を学ぶ若者たちが増えている！」



5月24日(日)ジャーナリスト堤未果(つづみみか)さん<写真>講演会が、会津若松市風雅堂で開催されました。相双地区からは相馬市九条の会のお世話により、マイクロバス1台(約20名)を仕立てて参加。はらまち九条の会員では、平田会長、佐藤邦雄さん、荒木千恵子さん、事務局早坂などが参加し、1,700名もの入場者の大講演会でした。

最初に、平和コンサートとして地元会津若松の各クワイア(教会音楽隊という意か?)によるゴスペルと唐橋郁さんの『一本の鉛筆があれば』が披露されました。九条の会の集会では珍しく(?)子供たちや若者の元気な歌声が会場いっぱい響き、感動!講演要旨は次の通りです。

講演要旨 9.11テロを隣のビルから目撃

堤さんは米国野村證券に勤務中、9.11世界貿易センタービルの崩壊を隣のビルから目撃。帰国後はアメリカと東京を行き来しながら、主としてアメリカの現状を取材しつつ、執筆、講演活動を行っているなどまず自己紹介。「最も親密な同盟国の日本が、最もアメリカのことを知らない」と切り出し、時折スライド映像を交えて、とてもわかりやすい講演でした。その中で印象に残ったことを二、三ご紹介します。

あの事件以来、アメリカは「庭付き一戸建て住宅を持つ暮らし」というアメリカンドリームは瞬く間に消え失せた。「テロとの戦い」の名の下に推進された「新自由主義」政策、つまり「官から民へ」と言って命と暮らし、安全に関わる公的な業務まで効率的にしようとする民営化したこと、また自由競争と自己責任の名の下にもっと生産と利潤を上げようと規制を緩和してきたことなどが、アメリカ社会の貧困化を加速させた。数年前のハリケーン・カトリーナも、災害対策事業までも民営化したことが招いた、自然災害というより人災です。学力低下など教育の諸問題も学校教育に競争原理を持ち込んだ結果です。

イラク戦争に駆り出されるのは若者です

極端な格差社会の中で、社会の落伍者となった若者は、派遣会社にリクルートされてイラクやアフガニスタンなどの戦場に駆り出され送られていく。イラクに派遣されているアメリカ兵の三分の二は、傭兵と派遣社員であるという。まさに貧困層がアメリカの軍事大国を支えているのが現実である。

除隊後に国籍取得や大学進学資金など、あるいは医療保険制度加入に有利ということで勧誘するのだが、実際には過酷な戦

場体験をして、辛い無事に帰還しても心に傷を負ってしまい、社会に適応できず、ホームレスになる若者の例もあるという。

それ以上に更に悲惨なのは、後方支援の民間会社から送り込まれた多数の派遣社員達の存在。彼らの労働条件は劣悪で、例えば食事なども兵士達が食べ残したものを食べているといった信じられない活動もある。しかも戦場では兵士とともに活動しているわけだから、攻撃されて死亡しても全く補償してもらえないという。

このように経済大国・軍事大国・貧困大国はそれぞれリンクし合いながら暴走しているのがアメリカの実態です。

リーダーを監視する人々が増えた

そのイラク戦争を始めたブッシュの後任を選ぶアメリカ大統領の選挙を取材して感じたことは、今までの選挙にはなかった現象として若者が積極的に活動し、また投票したことだという。さらに当選後はすべてお任せではなく、リーダーを常に監視する必要があるという意識を持つ人々が現れたことだという。しかし、オバマが750億円もの選挙資金を財界や業界から受け取っていて、本当にチェンジできるだろうか。どれだけ育て支えていけるのか、今アメリカ国民が問われています。

一番の敵は、我々の無知と無関心

あるイラク帰還兵は語っている。「愛国心に燃えて『テロとの戦い』に参加した。でもそこに闘う敵兵はいなかった。大量破壊兵器も発見出来なかった。真の敵は政府や大企業、マスメディアではない。さらに一番の敵は我々の無知と無関心だと思ふようになった」と。私(堤未果)は、その帰還兵の言葉の次に、「あきらめ」をつけ加えたい。

憲法を学ぶ若者が増えている

ところで、アメリカでは例えばイラク戦争に反対する市民運動をする人々にとって、その武器となっているのが憲法ということで、憲法を学びはじめる若者が増えている。堤さん自身も、ジャーナリストとしての活動を通じて、財界などのプレッシャーを強く感じた経験もあると語りながら、最後にニューヨークのある女性の詩「私たちは進んでいくすべての人たちのために」を紹介し、日本国憲法9条および25条を手に、私たちの未来を作る戦いに最後まで諦めることなく、力を尽くす決意を静かに語っていた姿が印象的でした。

最後に、実行委員会事務局長の呼びかけで「憲法前文・第九条」を会場全体で朗読し、散会しました。

講演者・堤未果さんの著書 岩波新書

「ルボ貧困大国アメリカ」 ¥700+税

ベストセラー、話題になっている本です!

続々・憲法塾 <主催:福島県九条の会 会場:福島市民会館、開催時刻:18:30~20:45、資料代300円>

07月16日(月)「アメリカ発の金融危機と世界同時不況」講師吉原泰助・真木寛彦

09月17日(木)「改憲をおびる新しい動向の特徴と運動の課題について」

010月15日(木)(講師未定)

詩人アーサー・ビナードさん

米国生まれの詩人アーサー・ビナードさんは、一九九〇年に来日し、日本語でも作品を書き始めた。戦争と平和をめぐって、驚いたものが二つあるという。



アーサー・ビナードさん



被災当時の第五福竜丸
=1954年撮影(静岡県焼津市役所提供)

「日本国憲法は未来への足場」

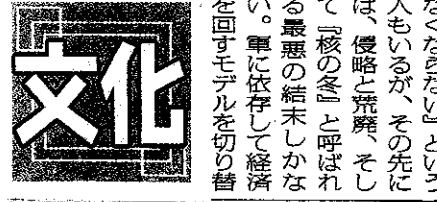
「アメリカでは、この事件はほとんど紹介されない。アメリカ人が日本に来て初めて知る自国の歴史です」とビナードさん。

この説明に疑問も持ったという。「第五福竜丸は、軍事機密に遭遇してしまっただけで、米軍に狙われて撃沈されるはずだ。ところが、生還した」

ていたビナードさんに「新鮮だったという。合衆国憲法は、軍艦の権限は連邦議会にあると定めているが、最後の宣戦布告は第二次大戦中。ベトナム戦争でも、イラク戦争でも行われていない。議会による武力行使が認められている。見解がとられているためだ。アメリカの憲法は、現実に力を発揮できないミイラにされて久しい。憲法ってそんなものかと思っていたので、戦争の放棄を規定した日本国憲法が実際に働いていることに驚嘆した」と語る。

米国は第二次大戦後も戦争を繰り返してきた。「一軍隊と戦争がなければ米国経済は回らない。だから戦争はなくてはならない」という人もいるが、その先には侵略と荒廃、そして「核の冬」と呼ばれる最悪の結末しかない。軍に依存して経済を回すモデルを切り替

える時期に来ている」とビナードさん。オバマ大統領は、地球温暖化対策を景気浮揚に結び付けるグリーン・ニューディール政策や核廃絶構想を打ち上げた。「オバマ政権の力だけで、国防総省に切り込み、予算を削減することはできない。実現するためには、オバマの背中を市民が押すしかない」



平和や戦争について、新聞などで意見を表明しましょう!

◆アーサー・ビナードさんは、一九六七年米国生まれの詩人。大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日し、日本語で詩作を始める。「日本語ばかりで講談社エッセイ賞、『ここが家だ、ベン・シヤーンの第五福竜丸』で日本給本賞、『左右の安全』で山本健吉文学賞を受賞。NHK・文化放送・東北放送などに出演しています。また、今年憲法記念日の五月三日付『朝日新聞』と『北海道新聞』に掲載の「戦争をとめよう・意見広告」の氏名公表のトップにビナードさんの名前が載っていました。



ビナードさん説
憲法に自信持つ
南相馬市・石田 賢二
(自営業 67)

だ、と期待し「日本国憲法こそ未来の足場になる」と話す。

先日の福島民報で米国生まれのアーサー・ビナードさんの記事は、憲法を守る上で一つの視点を提供してくれた。「第五福竜丸」で被爆し、死亡した久保山愛吉さんを二十世紀の英雄とする歴史観、アメリカ憲法のミイラ化など詩人の言葉は二十一世紀に希望の光を与えてくれるものです。世界平和の構築はオバマ政権を後押しする市民の力

▲5月3日付『福島民報』

上の寄稿文に石田賢二さん(本会事務局)は感動し、下のように投書し掲載されました。

▼5月13日付『福島民報』投書

文化面を藤城清治氏の連載記事とともに読み、滝桜の生命に続く平和への努力を重ねていきたいと考えさせられるものであった。